

## 日中民間文化交流 内藤湖南を語る会



賀衛方先生

内藤湖南研究会は、2019年7月1日午後、河合塾京都校にて、「内藤湖南を語る会」という討論会を共催しました。この会は、中国・北京大学法学院の賀衛方教授から、研究会代表の山田伸吾先生に申し入れがあり、急きょ開催が決まったものです。

賀教授のご専門は法学ですが、日本の歴史学者である内藤湖南に強い興味をもたれ、深く研究されています。一方、今回、賀教授とともに来日された方々も、法曹界、環境保護、国際交流、文芸などさまざまな分野でご活躍中でありながら、内藤湖

南に興味をお持ちで、それぞれの視点や見地から研究されている方々です。

「内藤湖南の旅」と題した今回の来日では、湖南の資料展示で著名な秋田県鹿角市の先人顕彰館への訪問や湖南の墓所がある京都の法然院の墓参といった視察に加えて、日本の研究者と湖南について深く議論したいとのことで、内藤湖南研究会への申し入れがありました。

討論会は、まず山田先生と賀先生から湖南に関する発表がありました。賀先生のご発表は、「最近、内藤湖南に興味を持つ

方は中国では増えており、1万部以上売れた書籍もある」など最新情報も交えた興味深い内容でした。その後、自己紹介を兼ねて、参加者お一人ずつ、湖南との関わりや研究成果などを発表されましたが、いずれも充実した内容であり、あっという間に終了予定時刻になってしまいました。質疑応答や意見交換は、別会場で夕食を兼ねて和やかに行われました。



山田伸吾先生



みなさまのご発表のうち、山田伸吾先生と葭森健介先生のお話を下記に示します。

[山田先生のお話](#)

[葭森先生のお話](#)

## 山田伸吾先生のお話

**山田** いや、20分くらいだけでも、通訳をやるとかなり時間がかかっちゃうんで、途中で休憩を挟んでやりたいと思います。お手元にお菓子がありますので、それをつまみながらざっくばらんなところで話し合いをしたいというふうに思っていますけれども、最初に私自身が少しだけ、いま考えている、内藤湖南をどう考えるかということについての私の考え方をちょっとだけ申し述べたいというふうに思います。

あまり細かな話はここではできませんが、さきほど近世論、湖南の近世論ということで賀先生がお話しされたわけですが、それに関する問題を、いま私の考え方を展開したいと思います。『内藤湖南の世界』という本の中で辛亥革命を扱った際には、湖南の考え方を「もうひとつの近代」という形で表現しました。

**(通訳)** それは山田先生の「もうひとつの近代」、内藤湖南の言い方ですか、山田先生の。

**山田** ぼくの言い方です。内藤湖南の近世論を私の捉え方で、西洋近代とは違うもうひとつの近代という設定を湖南がしたんだというふうに考えたわけです。その考え方はいまでも変わっていません。ただ、ちょっと深めたといいますか、もう少しこれを深めるとどういうことになるかということをおぼえておられます。

で、内藤湖南は中国に関しては宋代以降を近世、まあこれは近代と言っていいかと思いますが、近代というふうに捉えました。ただ問題は、これはどういうことかということですね、辛亥革命を革命と認めていないということでもあるわけです。辛亥革命によって新しい体制が出来上がった、五四運動から中国の近代化が始まったという考え方とはまったく別の考え方を湖南はしていたわけです。

中国の、人民中国、毛沢東革命を評価する人からは、反動的思想というふうに湖南の思想が捉えられたわけです。ただ湖南はたぶんだめだというふうに言っているわけではなくて、清朝、宋以降の近世というのがずっと続いて行って、将来的には共和制というところに落ち着くのが中国の近代の最終局面であるというふうに考えていたんだと思います。

私が学生の頃はやはり中国革命というのは偉大な革命であり、新しい人間社会ができたというふうに信じておりました。

**(通訳)** それは人民中国の革命ですよ。

**山田** 辛亥革命も含めて、辛亥革命から人民中国の成立までを一連の新しい中国の成立というふうに捉えて、それを歓迎しておりました。喜んでおりました。

**(通訳)** 革命史観。それはたぶん中国の知識人は日本思想史的な文脈がわからないと思うんですけど、ちょっと説明しておきます。

**山田** いろいろの現実の中国社会の動きを観察し、さらに内藤湖南を読むということを通じて、そういう捉え方、つまり辛亥革命以降新しい中国つまり人民中国は素晴らしい社会だという考え方そのものに疑いを持ったというのが2～30年前のことでございます。私の。

**(通訳)** というのは、内藤湖南の学説は。

**山田** (内藤湖南)を読むということと、現実の中国の動きを観察するという、ふたつ併せたところで革命史観に対する疑いを持ったということです。

ただ、中国、いまの中国も、清朝よりは少し違う世界を築いているわけですが、必ずしもいい方向へ行っているかどうかというふうにはなかなか判断できないということがちょっと難しいところなんです。湖南の考え方によると、大きな流れの中では人民中国もひょっとしたら位置付けられるのではないだろうかと思うんですね。近世の最終局面がどういう形になるかという意味での捉え方だと思いますけれども。

別に湖南の考え方が正しいというふうに確信しているわけではありませんけれども、湖南の捉え方に従って、清朝、明・清から次の中華民国、それから人民中国という流れも違う形で捉えなおすことができるのではないかと考えております。

それだけではなくて、基本的に湖南は日本史について、応仁の乱以降を近世、近代というふうにと捉えているわけです。

**(通訳)** 応仁の乱？

**山田** 難しいね。要するに湖南は、明治維新、ちょうど日本のいわゆる近代化の真っ只中において、この明治維新の淵源、大元はどこにあるかというふうに考えて、応仁の乱という時代にまで遡っていくことができたわけです。

この考え方は実は中国の辛亥革命以降をそう高く評価しないのと同じようにですね、内藤湖南はですね、明治維新を新しい日本の成立というふうには考えていなかったということでございます。

別に明治維新がだめだと言っているわけではなくて、江戸時代との連続性というのがあったと。それはもっと言えば応仁の乱からの連続性の中で必然的にこういう形になっていったんだという理解を誘うというか、そういう理解を湖南をしていると思います。

江戸時代からの連続性で明治維新を捉えるという捉えの方が、実はいまの日本社会を捉える上でより有効なのではないかと私は考えております。

まあ明治維新は基本的に西洋の近代化、西洋近代というのを模倣してというか、そこに近づこうという努力をしたというふうに一般的には考えられております。ただ現在の日本社会を見ても、西洋化とはまたちょっと違う日本的近代をやっぱり作り上げているのではないかというふうに思われます。

で、これはまあ日本の天皇制の問題も考えてみますと、まああれは酷い独裁体制ではなくて、明治維新以降も基本的には象徴天皇のような力しかなかったというふうな捉え方もできているわ

けで、そういう天皇制を持った近代社会というのはきわめて日本的なものではないかというふう  
に考えます。

若かりし頃は、やっぱり天皇制なんかは潰さなきゃいけないし、潰すべきだと考えていたこと  
は確かなんですが、潰れないという現実というのがちょっとなぜかということも考えなきゃいけ  
ないということを考えております。

**(通訳)** それは日本共産党の話？

**山田** 日本共産党はまあ（笑）。やはり戦後、民主主義を思想から考えると、天皇自身も奴隸的  
服従を強いられている地位なんです。そういうのの存在を許したまま日本が制度として国家を  
作るというのは不思議な在り方なんです。そういう犠牲によって作られる制度というのがいい  
のかどうかというのは別の問題なんです。この良い悪いとは別に残ってしまうということにつ  
いてわれわれはどう考えたらいいかということを考える場合に、湖南の江戸期からの連続性で明  
治維新を考える方がはるかに面白い考え方になるのではないかと考えております。

それと同じように中国のいまの共産党の在り方も、清の時代の官僚体制との連続性で考えるこ  
とも可能なんじゃないかというふうに私は考えております。

まあ中国のいまの体制がいわゆる昔のプロレタリア独裁にあたるかどうかというのはわからない  
んですが、官僚体制を支えるイデオロギーとしては格好のものだったんじゃないかなというふ  
うにちょっと考えております。

いま考えていることは湖南の近世論を演繹、少し拡大したものなんです。いまそれが日本史  
にとって中国史にとってどういう問題なのかを考えている段階です。どう考えるか、それをどう  
考えるかということを考えている最中でございます。

私のほうからの問題提起は以上でございます。あとでまた議論を。（拍手）

それでは葭森先生のほうからまた違う角度でのお話をお願いいたします。

## 葭森健介先生のお話

**葭森** 私は魏晋南北朝研究の専門家です。ですから私は歴史、時代区分の問題から内藤湖南研究に入りました。それで私は特に内藤湖南という人の歴史問題、歴史観について述べますと、彼の歴史観はヨーロッパの歴史を基準にして中国や日本の歴史を見るのではなくて、中国の歴史、日本の歴史の事実から中国・日本の歴史について考えようとした、そこに湖南の優れたところがあると思います。

特に内藤湖南が若い頃、明治時代の日本はヨーロッパの真似をしていました。ですから、それ以前の江戸時代までの歴史を否定して、明治は西洋を手本にした新しい歴史を始めた時代だと考えていました。たとえば福沢諭吉という人がその代表です。

**(通訳)** 内藤湖南の評価は。

**葭森** 内藤湖南は福沢たちの後の時代です。明治時代の一般的な考え方は、ヨーロッパが優れていると考えていました。だからヨーロッパの歴史から日本の歴史を見る、中国の歴史を見る、これが普通の一般的な考え方です。ですから遅れた江戸時代より前の歴史は学ばなくてもいいと考えていました。それが明治維新だとしたわけですね。

しかし、内藤湖南はいま山田先生がおっしゃったように、ずっと江戸から明治は続いていると考えていた点で福沢たちとは違っていたのです。しかしながら一方でやはり庶民の力が拡大していくのが歴史であるということは認識していました。

内藤湖南と一緒に京都大学の教授であった内田銀蔵という人、それと原勝郎という二人の研究者がいましたけれども、その人たちはヨーロッパに留学してそして京大の教授になりました。その人たちはヨーロッパの歴史を勉強して、近代というものはルネッサンスであると考えました。ですから、内藤湖南以外にも、内田と原の二人も応仁の乱、そのあたりに先ほど申しましたルネッサンスが始まったと考えていました。

**(通訳)** すみません、そのふたりの考え方は同じですか？

**葭森** 考え方は湖南を含めみな同じです。京都大学の先生方は同じように、日本史で言う室町時代にルネッサンスが始まったと考えています。ただ、内藤湖南はその変化については中国の影響を受けていると考えました。ですからそれは宋以降の中国の文化と日本の応仁の乱以降の日本の文化に起こった現象が非常によく似ているというふうに考えました。

そして、内田銀蔵という人は江戸幕府の政治形態を絶対王政、ヨーロッパの **absolutism** にあたるものだと考えました。ですから私は、私の推測ですが、内藤湖南も宋代以降の君主制はヨーロッパの **absolutism** だと考えていたんじゃないかと思います。

**despotism** も専制は専制なんですけど宋代の君主独裁は所謂古代の専制主義 **despotism** とは異なる、漢代の皇帝制度と宋代以降の皇帝は違うと湖南は考えていた。つまり漢代以前の皇帝制とは異なった形態、やはり宋代以降の君主制というのは、ヨーロッパで言うなら近世的な皇帝制の

形、絶対王制だろうというふうに考えていたんじゃないかと思っています。

**(通訳)** というのは漢以来の。

**葭森** 漢以来の皇帝制とはもっと古い貴族性的な、血縁、家柄の尊重するような形。

**(通訳)** それは despotism に相当する。

**葭森** そうそうそう。まあそれも湖南はどう考えたかわかりません。しかし、宋代以降はわりと近代的な皇帝制、つまりヨーロッパの絶対王政、十六世紀以降の絶対王政というほうが近いんだというふうに考えたと思います。皇帝を支えるいろんな官僚制度(科挙)とかですね、そこを比較したときに変化を感じたのだと思います。

ただし、内藤湖南はそうした変化を皇帝の側から見るのではなくて、社会の側から、庶民の暮らしの側から考えたところに長があります。だから文化もですね、一部の人だけが楽しめる、貴族だけが楽しんだ文化から、庶民も楽しめる文化に変わったと、これが唐宋変革の特徴だと考えています。

ですからこれに対応して、やはり宋代の皇帝制度、君主制度というのも、中国は漢代と変わってくる、つまり中国で一貫して続いてきたのは皇帝制度は皇帝制度だけど、時代ごとに変化していると考えていたのではないかと思います。

で、ここでちょっと私の個人の考え方なんですけれども、アジアの君主制にはやはり儒教の伝統というのがあると思いますので一言述べてみたいと思います。

それは、中国だけではなくて朝鮮半島も日本も同じです。その地域の君主制の一番の特徴は、民が、庶民が自分が権力を持って政治を行うのではなくて、庶民の生活の問題を君主とか為政者の誰かに預ける。預けられた人はやはり民本主義、民の声を基本にする政治を行わなければならないのです。民主でなく民本です。

ですから、上に立つものも民の生活を考えなければいけないという原則があって、民衆の生活の問題を、民間の問題を先ず第一に考えてしまう。民衆よりも為政者の方が先に民間の生活を考える。それを民が期待する。これは日本も同じです。

ですから日本の世論調査というのがあります。内閣の支持率を報道する世論調査というのがあります。そのときに、「なぜあなたはいまの内閣を支持しますか、安倍政権を支持しますか」という質問に対して、「他の政権よりまし」という理由の回答が多数になります。つまり、自分たちで新しい政権を作るのではなくて、政権を担う政党、政治家の中でどれが、誰がいいか選択するだけです。それはおそらくアメリカ、欧米の民主主義、デモクラシーDemocracyとはぜんぜん違うものだろうと思っています。

それがおそらく朝鮮半島の北も南も含めて、やはりそういうような政治体制があるのではないかと思います。ですから、私たちが「民主主義」と言ったときに、民主主義というのは何なのかということをおアジアにおいて考える必要があるのではないかと。内藤湖南はそういう問題を踏まえつつ辛亥革命の後の共和制というものを論じたのではないかと思います。

湖南が辛亥革命の共和制について言うときには、共和制というのも欧米のデモクラシー、民主主義とは違った形での共和制というものを考えていたんじゃないかと推測しています。ですから革命派とされている人に対しては、内藤湖南の評価はあまり高くないですね。ヨーロッパの、アメリカとか真似をし、共和制を打ち立てようというようなことを考える革命派に対する内藤湖南の評価は非常に厳しいです。

そういうふうに考えた方が湖南の歴史観についての理解はしやすいのではないかと思います。